	一九一四年	一九一六年	一九一八年	一九一九年
一月	一、五六六、五〇五	一、〇七八、三六八	九三三、五七〇	五〇一、二〇八
二月	一、四四五、五一一	一、〇三六、六八三	八〇二、七八八	四六九、二〇九
三月	一、六〇二、八九六	一、一一四、一九四	一、〇三九、〇九二	五四五、九三九
四月	一、五三四、四二九	一、〇七三、七〇六	一、〇八四、六〇一	四三四、三二八

本年一月に於ける鋼產額は五七四、一九一噸、二月に於ては五二九、九一三噸、三月に於ては六三四、八九三噸、四月に於ては四二六、七一七噸なるは前記の如し。

日本最初の鍼力產出

鍼力は日本では出來ないものと一般に斷念めてゐた處が今度舶來品に劣らぬ優良品が產出さるゝことになつた、戰後の國產奬勵の意味から此の鍼力の製造に着眼したのは、日東製鋼株式會社で、戰時中から川崎分工場にて技師長中島正賢氏、技師松葉、市岡、山下三氏が寢食を忘れて研究苦心の結果、五月末に至り漸く完全な鍼力を製出することゝなつたので、八月十三日山本農相、小阪祕書官、小野興銀副總裁、四條工務局長、崎川鑛山局長吉村、小西兩技師等が其工場を視察し、山本農相は小野副總裁を顧みて『君も之れで責任解除だ』と喜びを述べた、之につき社長井上角五郎、取締役根本龍太郎兩氏は交々語る『我國での一箇年鍼力の消費高は民業約四萬噸、陸軍三萬噸で內地生產は皆無であつたが、外人の技師も雇はず眞に我々のみで非常な苦心の結果漸く輸入品に劣らぬものを製作し得るまでに漕ぎ附けたれど職工の養成からせねばならぬから容易でない、目下日々鐵板四噸半を鍼力にする能率があるが、月末までには十噸、十一月末には二十噸を製出し得るが、行く行くは年額一萬噸位迄は擴張する計畫にて此の國家的工業も其の緖についたことを衷心欣喜に堪へぬ』と雀躍りしてゐた、政府でも將來補助を加へるであらうとの事である。